

野村精一著

日本文学研究史論

笠間書院刊

著 者 略 歴

野村精一 (のむら せいいち)

- 1929年 東京に生る
- 1953年 東京大学(旧制)卒業
- 1958年 同上大学院修了
- 1967年 山梨大学教育学部助教授
- 1973年 同上教授
- 主な編著 『源氏物語の創造』
『源氏物語文体論序説』
『源氏物語入門』
『孟津抄』
『和泉式部日記・和泉式部集』

日本文学研究史論

●笠間叢書 178

昭和58年10月25日 初版発行

定価 6,000 円

著 者 野村 精一◎

発行者 池田 つや子

発行所 有限会社 笠 間 書 院

〒101 東京都千代田区猿楽町 2-2-5

☎ 03-295-1331 (代) 振替東京 1-56002

3391-951178-0924

三美印刷・手塚製本所
(本文用紙：中性紙使用)

『日本文学研究史論』

目次

思想史としての研究史……………	一
-----------------	---

——序にかえて——

I

藤岡東圃のこと……………	五
--------------	---

——明治期知識人の一肖像——

『日本風俗史』をめぐる……………	二
------------------	---

——藤岡東圃・初期小説の思想——

藤岡作太郎論おぼえ書き……………	三〇
------------------	----

日記文学論の黎明……………	四四
---------------	----

——『国文学全史 平安朝篇』の成立過程をめぐる——

『鎌倉室町時代文学史』をめぐる新資料……………	五九
-------------------------	----

——『東圃遺稿』拾遺——

II

紫式部日記（——一九五九）	二
枕草子 I（——一九六九）	四
——作品論・作家論——	
枕草子 II（一九一六——六九）	一七
——文学史論——	
和泉式部日記（一九六〇——七七）	一四
源氏物語 I	一六
——訓みの表現空間——	
源氏物語 II	一八
——『孟津抄』の形成——	
源氏物語 III	二〇
——源氏物語の和歌——	

III

学の思想史としての研究史についての走り書き	三三
源氏物語古注ブームをめぐる	三〇
清水好子著『源氏物語の文体と方法』をめぐる	三三
学界展望・中古文学（一九七九）	三六
伊井春樹著『源氏物語注釈史の研究』について	四六
伊藤 博著『和泉式部日記伝本攷』	五九
渡辺 実著『平安朝文章史』をめぐる	六五

——国語学と文学史とは如何にかかわるか——

*

人名索引	七一
私語片々	七五

思想史としての研究史

——序にかえて——

研究史という分野は、他の諸科学においては知らないが、国文学の世界では、十分な市民権を得ていないように見える。個別的な作品・作家については、それなりに研究の時間的経過をたどる記述がないでもないが、どうやらそれらの多くは、これから卒論・修論の類に手をつけようとしている学生・院生諸君のために書かれた、半ば啓蒙的なものとおぼしく、印象批評めいた感想を時代順に並べてきれいに整理されては見えるものの、その記者の鏤骨の作品、といった印象とは程遠いものばかりである。学界展望とか時評とか題して公表されているものも、いささか相似たもので、裁判官か教師然として、高いところから評価を下している趣である。せいぜい学説史ないし諸説一覧といったところが、研究史の名の下に、まかり通っているのが現状なのだ。これでは学問の一領域たりえないのも、無理からぬところであろう。それもどうやら、個別的な作家論作品論はやりの国文学界の現状を反映しているらしく、他方であの文学史論の衰頹とも結びついてるようにも見える。

そうしたところでは、やはり総体的な、もしいいくば思想史としての研究史、といった方法が、どうしても必要だ、という気がする。ここを媒介にして初めて、古典研究と近代批評とが、学としても、思想としても結びつく可能性が生じるだろう。今までのところ、こうした結び付きは、たとえば折口信夫Ⅱ釈迦空のような、ないし斎藤茂吉のような、超一流の個人の中でしか果たされていなかったものであり、それゆえその亜流化によってのみ、その一般化がわずかに進んでいたにすぎないように思われる。

もちろん折口らのごくわずかな例外を除いて、国文学なる学が、宣長らに匹敵する個性を生産していないことが、近代の研究史を思想史として構築することを妨げて来たことは事実であって、今更何ともいいようもないが、それはそれなりに、たとえば与謝野晶子の流れを辿いだ我が国文学者たちの手によって、それまで単なる記録文書にすぎなかった王朝の日記作品が、昭和初期以来「日記文学」として高い評価を受けるようになったのは、それなりの精神的な出来事だったように思われる。実を申せば、近世国文学と近代国文学を結び付ける——あるいは切斷した——もう一つの節目として、東園藤岡作太郎という個性のことが、頭にあるのだが、もうそのことについて述べるゆとりはなさそうである。

さて、右のようなありさまで、いちおうの見取り図は引いたものの、今のところペーパープランの域を出ていない、というのも実情である。多様な理論や仮説を立てることも必要だが、それに見合うきちんとした実証の方法あってこそ、それが学として成り立つわけであって、それが無い限り大ぶろしきを広げたとどまる。万人を納得させるに足るほどのものでなくてよいから、対象と方法を求めて、ともあれ歩き出さねばなるまいが、しばらく孤独な思いで作業を続けねばならぬだろう、とは思いついて定めているしだいである。

(朝日新聞昭和57年6月4日付夕刊「研究ノート」欄。表記上不適當な箇所を改めたほか、一部文脈に補正を加え、副題を付した。)

近代国文学アカデミズムの形成史の上で殆ど決定的な役割を果たした一人が、東圃藤岡作太郎である。しかし、その思想的な位置付けはおろか、伝記資料すら完全に整ってはいない。ここではそれらの状況を考慮して、もっぱらその対象化することの意味を提示すべき角度からの問題提起のための稿を収めた。なお初期伝記資料の紹介を中心とした別稿「藤岡東圃の初期」がある。かたがた参照頂ければ幸いである。

藤岡東圃のこと

——明治期知識人の一肖像——

藤岡東圃——本名は、作太郎——といっても、今日では、一部の国文学界を除けば、ほとんど知られてはいない名であろう。その知名度は、かれの莫逆の友として相許したという西田幾多郎にも、鈴木大拙にも、いずれもはるか及ぶまい。況や、現存する藤岡作太郎宛書簡によっても知られるように、その交際圏に、夏目漱石、幸田露伴、はたまた田岡嶺雲といった人々の名を見出すとすれば、その方がむしろ一般には、奇異の念をもって見られるほどではあるまいか。しからばここで、誌面を割いて、その略伝を紹介するのも、またやむをえぬことであろうか。

東圃藤岡作太郎、明治三年（一八七〇）七月、加賀金沢に生る。前記西田、鈴木、田岡らもこの年の生まれである。幼少より漢学塾に学び、成績優秀の故に石川県令より褒状を与えられたこともあった。明治十一年（一八七八）明治天皇金沢行幸に際して、その作文「鳥居」は、県庁に陳列されたともいう。同十六年（一八八三）石川県専門学校に入学、同二十年（一八八七）学制改革により、これが第四高等中学校となるに及んで、それに編入された。この間、西田、鈴木らと相知り、同人誌や回覧誌を編み、東圃、李花亭主人などと号した。『北国新聞』では東圃という戯号を用いた。かれらの交友は、ここから始まる。四高卒後一年にして、東京帝国大学文科大学に入学、国文学を専攻、在学中から、夏目漱石らの編集する『哲学雑誌』や、『史学会雑誌』などに論を発表した。同期の漢学科選科生に前記田岡がおり、その夜鬼窟にも足を運んだ一人であったらしい。嶺雲主宰の『江湖文学』にも論を寄せる一方、作太

郎がしばしば筆を執った、かれの故郷金沢の『北国新聞』にも嶺雲の稿を見ることが出来る。更には、下って明治四十二年（一九〇九）病中の嶺雲を慰藉し、且つは生活の一資たらしめるべく、その友人たちが編した『むら雲』なる文集にも、夏目漱石、三宅雪嶺、志賀矧川、笹川臨風、泉鏡花、内村鑑三、高浜虚子らと相並んで、「平家物語」の一篇を『帝国文学』から転載している。二十七年大学卒後、関西の二、三の中学の教師を経て、三十年三高教授、三十三年東大助教授に転じて、時代別の文学史を中心に、その他美術史、神道史、国学史などを文明史の立場から講じた。四十三年（一九一〇）二月、宿痼の喘息重く没す。時に満三十九歳であった。

この間、平出鏗二郎との共著『日本風俗史』二卷（明治28年）、『近世絵画史』（明治36年）、『国文学全史 平安朝篇』（明治38年）、『異本山家集』（明治39年）、『松雲公小伝』（明治41年）等を著したが、いずれもそれぞれの領域における先駆的業績として、古典的位置を研究史上に確保している名著ばかりである。就中、『異本山家集』は、早稻田派の学者和軒梅沢精一との間に論争をまき起したが、その序文を記したのが幸田露伴であった。作太郎が少年時代習作的に発表した創作類には饗庭篁村の影響下にあるとされるものもあるが、根岸派との親縁関係については、今後の検討を要するところであろうか。このほか帝国文学会評議員として、『帝国文学』の編集その他に参与した。このころ同じく評議員であったらしい漱石とも交渉があり、たとえば評議員会の欠席通知をかね原稿依頼を作太郎に断ってきた漱石の書簡（全集未収）も最近発見されている。また『帝国文学』誌上に発表した多くの詩文のうち、「新体詩論」は、岩野泡鳴によって反論されるなど論壇の話題を提供したほか、その美術評論についても定評があり、のちには文部省美術展覧会審査員をかねたこともある。

没後、大学における講義ノート類を中心に編纂された『東園遺稿』四卷が、のち戦後に至って、その修訂版『藤岡作太郎著作集』四卷が公刊され、最近では高木市之助『国文学五十年』（岩波新書、昭和42年）にも引かれるところ多く、代表作『国文学全史 平安朝篇』は、現代表記などに改められてはいるものの、平凡社刊東洋文庫に、あるいは

講談社学術文庫にも収められるなど、該学界における声望は、依然として高い、というべきであろうか。ともあれ、三十九歳という短い生涯の中に、しかも生来虚弱体質で日夜咳疾に悩まされつつも、多様な足跡を残したことは特記されていいか、と思われる。その死に当って、多方面から哀惜の聲が挙ったのも当然であつた。

さて、右の簡略な閥歴からも知られるように、已が専門の学に踴躍して、その系を自ら閉ざす底の国文学者ではなかつた。元來画筆に親しみ、一度は美術学校を志願することも考慮し、東大入学後も、美校生某より岡倉天心の日本美術講義ノートを借覧、微細に亘って筆写したほどであり、また、大学入学に際しても西洋史を選ばんか、の岐路に悩んだともいう。かれが国文を選んだ細かい経緯は不明だが、たとえば建築科志望の夏目金之助が英文科に転身したという事実を連想させる。かれら明治十年代の少年たちにとっては、近代アカデミズムの要求する専門分化した学問のかたちは、むしろ必然性に乏しいものであつたのだらう。それは流動する時代の空氣の然らしむところだった、といいかえることもできるはずだ。

かれ自身は、漱石や、先輩芳賀矢一のように洋行する機会に恵まれなかつたが、常に洋書に親しみ、その書架に蟹行の書を蓄えること、他の国文学者に似なかつたという。現に、年次は不明だが、漱石が、作太郎の尋ねに応じて、Basil Worsfold の *The Principle of Criticism: An Introduction to the Study of Literature* に ついてふれてゐる新発見の書簡もある。「大して要領を得たりとは申しがたかるべく候へども一寸御参考になり候べきか書肆は George Allen に候。価は忘れ候」と漱石は注しているが、のちに作太郎は入手したと見え、現在金沢市の石川県立中央図書館内のその旧蔵書を集めた『李花亭文庫』に、この書は収められている。因みに、この李花亭文庫に収蔵された、W・クーパーの特集には、漢詩句の書込みがあり、いわばかれにおける漢学と洋学との接点をここに見ることが出来る。それは漱石の問題でもあつたことは、既に江藤淳・桶谷秀昭氏ら諸家によって指摘されたところである。

う。なおこの詩人については、漱石もまた『帝国文学』にのせた「英国詩人の天地山川に対する觀念」のなかで言及している。このほか李花亭文庫には、作太郎が大学在學時に聴講したとおぼしいケーベルのカント美学の講義テキストも保存されている。これらの事実も、その志向・性情の差こそあれ、かれらが同時代の知的環境を共有していたことを示すすがにほかなるまい。後年のことに属するが、同じく李花亭文庫の漱石著『文学論』『文学評論』の、それぞれ最終頁に、ペン書きで、「四一、七、二六、一読了、博治の識を以てして独創の見を立てんとする所敬服すべし」「四二、十一、十三、病中一読了、例の如くちと長過ぎるやうに思ふ併し説明の精到なるは感服の外なし」と所感を記しているのは、それなりの共感ないし私淑の表われであろう。何故なら、この李花亭文庫蔵書が悉くこの種の感想を記載してあるとは限らないからで、これらに類する記述を求めれば、せいぜい『子規隨筆』の末尾に、「三十八年二月六日一読了春色秋光ハよます墨汁一滴病床六尺覺えず涙下るところ少からず」とあるぐらいで、多くは「一読了」ぐらいで終っているのである。

加うるに、『中央公論』（明治41年3月）の口述筆記「夏目君について」、『国文学史講話』最終章の「最近の小説界」、あるいは『北国新聞』所載の「文壇瞥見」（明治39年1月1日）、「最近文学談」（明治40年7月14日）などにおいて示された漱石——具体的には「猫」「草枕」「虞美人草」など——に対する高い評価の姿勢は、三十九年八月三十一日付東圃宛書簡（全集所収）や、前記評議員会の断り状など漱石の側からの反応と相まって——この断り状の前文には「拜啓虞美人草御推賞にあつかり御礼の至御親切の段感謝致候」とある——そのような共感の延長上にあるものが、客観化されたかたちだといってさしつかえなからう。

さて、以上のような記述は、必ずしもかれ藤岡東圃が、隠れたる初期漱石文学愛好家のひとりであったことを証し立てようという意図をもつものではなかった。そのような発想からするならば、かれを漱石山脈のいわば外輪山に置

くこともできぬわざではあるまいが、過剰の比喩に陥ることは、今さけておく。問題は、この小文ではわずかに東圃―漱石の間にのみ引かれた実線が、実は明治十年代にその形成期をもった知識人たちの精神構造のここかしこに、同じく引くことの出来る底のものではなかったか、ということにある。

ところでこの軸線は「明治の精神」という一語でおきかえることもできるかもしれない。しかし、このことばを、漱石が「ころ」の終章において用いたとき、それは少くとも大正三年（一九一四）のことであり、明治「聖代」は既に終焉していた。東圃没後四年のことである。だからかれは、大逆事件も乃木殉死の報も聞くことなく世を去った。いわば「明治」という時代の最も幸福な時間を、即自的に生きたひとりだったのである。

もっともその東圃ですら、日清の役の真只中で書かれた、『北国新聞』連載の習作小説——仮名で書かれた——

「この春」や、同じく日露戦中連載した小エッセエ「睡余雑談」などにおいて、間接的ながら軍人の武断横暴を批難する字句を見出すことができる。これは当代の庶民感覚の平均的水準であつたはずだ。（そういえば「ころ」の「先生」の自死は、「私」の父——ひとりの庶民である——の、「天子様もとうとう御かくれになる。己も……」ということばに先導されていたとおぼしい。）

ここでやや飛躍にすぎる連想が許されるなら、先の「虞美人草」などに対する評価も、そこからよって来たるものがあつたのではなからうか。もちろんしかく速まつた断定をここで下す意図はないのだが、ある種の予見として、この期の知識人と称せられるべき人々が、以降のそれと明確に区分さるべき表徴の一つとして、当代庶民一般の存在、感覚に密着していた、と想像してみたいのである。純文学対大衆文学といった図式的対立の出現以前の状況をそこに見るとすれば、そのような磁場から「草枕」も「虞美人草」も、そして藤岡東圃という忘れられた文学史家の存在も、改めて顧みられてもよいのではなからうか。そこから復原された明治文学史は、当今流布のいわゆる「近代」文学史とは、いささか異つた相貌を見ることが出来るかもしれない。あるいは、その担い手たちが、「距離をおいた関心」

（L・コーザ）を現実に対して保つ近代的知識人ではなかったにせよ、少くとも「その社会のために世界の解釈を準備することを専門の仕事とする」（K・マンハイム）人々であったことは証し立てうるのではなからうか。

それらの視座は、おそらく日本の「近代」というもののへの一つのアプローチの基点たりうるものとはなろう。但しそれら包括的な論点への直接的な接近は、この小稿のよくしうるところではない。とりあえず東園藤岡作太郎なる、明治の「知識人」の存在を紹介することで、責を塞ぐにとどめておくこととする。

（UP）4号、昭和48年2月）